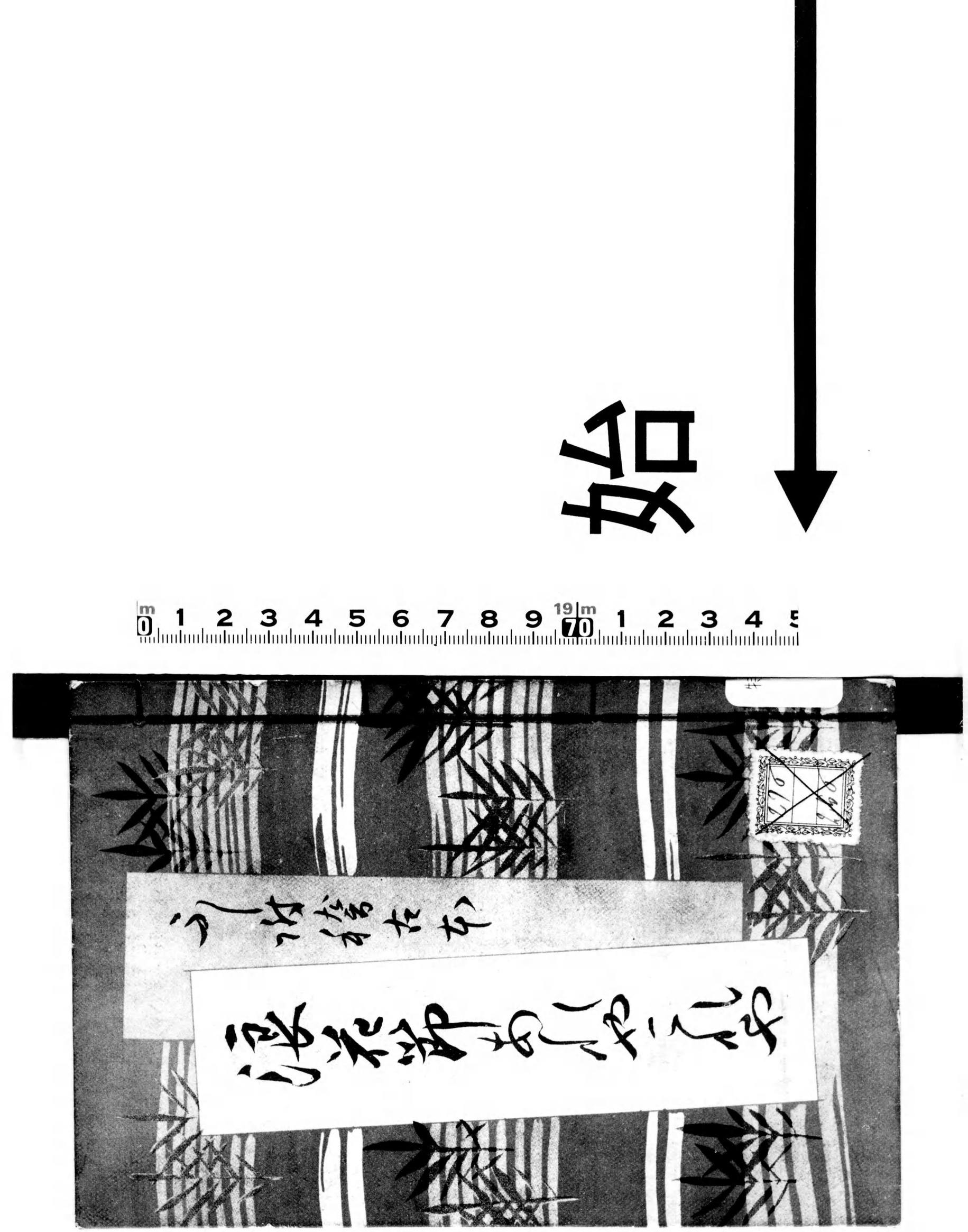


特106
486

帝國圖書館藏

浪花節あれやこれや

ふし付稽古な

浪花節新聞社編

大正
3. 3. 26
内交

奈良丸の蓄音器で、最も耳に付いて居るものは『あれやこれやの手違を一、受けて被むる身の耻辱と』云ふ一節で、俗に『あれやこれや』の手違ひ節とまで、云はれて居ります。

さて其處で、浪花節を一寸でも、稽古をして見ようと思ふと、先其ネタ本の必要が起つて來る、ネタ本を手に入れて、文句丈けは覺へて見たが、その節廻しが解らない。

處が此のふし廻しを會得するやうな、書籍が、未だ世の中に發行されて居ない、それを浪花節熱心の人は、常に遺憾として居た處であります。

世の好浪者は、謠曲や琵琶歌のやうに、節付けをした書籍を、望んで居た事は、久しい間の希望であつたが、浪花節に限つて、符號で曲譜を現はすには、中々困難である、寧ろ出來ない仕事である。

併し浪花節書籍の發行を、專門として居る、三芳屋の主人神谷氏がドウかして、此の書を發行して、好浪家の希望を滿たさうとして、余に相談のあつたのは、四五年以前からの久しい希望であつた、之れを遂行するに、種々な困難を重ねて居たが、今度漸く、その目的を達した事であります。

されば普通の活版印刷では、言葉の餘音を現はす事が、出來ないから、思ひ切つて石版の印刷として、出版した次第であります。

終りに望んで、編者として一言申上げて置きたい事がございます、元來奈良丸節の練習は、蓄音器に基く人が多いやうですが、夫れは到底出來ない事であります、その理由は蓄音器の音譜は聞く事を本位として、吹き込んでありますから、聞いて居ると頗る面白いが。

さて之れを眞似する事は不可能である、夫れはレコード一枚が三分三十秒を限

られてある、此の短かい時間の中に、聞いて快感を與へる爲めに、節廻しを殊更に作り出して、抑揚波瀾頓挫を出來得る限り、多くしてあります。

吹き込んだ自身でさへ、此の節廻しは、二度と再び出來ない事として居ります、されば蓄音器の吹き込みには、壽命が縮まるとまで云ふ位に、作り上げた節廻しであるから、素人としてトテモ眞似の出來る、理由がないのでございます。

そこで素人にも眞似の出來るやうに、節付けをして奈良丸節を、そのまゝに語られるやうに、一の書籍として發行したものは、即ち此の『あれやこれや』の中に悉く收めてあります。

夫れ故奈良丸節の研究をして『あれやこれやの手違ひを受けて被むる身の耻辱』と云ふ吉田一流の玩味を練習して見ようと思ふ諸君は、此の書を購はれ玉はん事を、お勸め致します。

余は浪花節練習の養成に、志して居る事は多年の志望であります、近く奈良丸と共に養成所を設立する事を、目論んで居ります、遂行の暁には、此の書を教科書とする爲め、養成所の設立に先んじて、茲に發行した次第であります。

あれやこれやの手違ありし

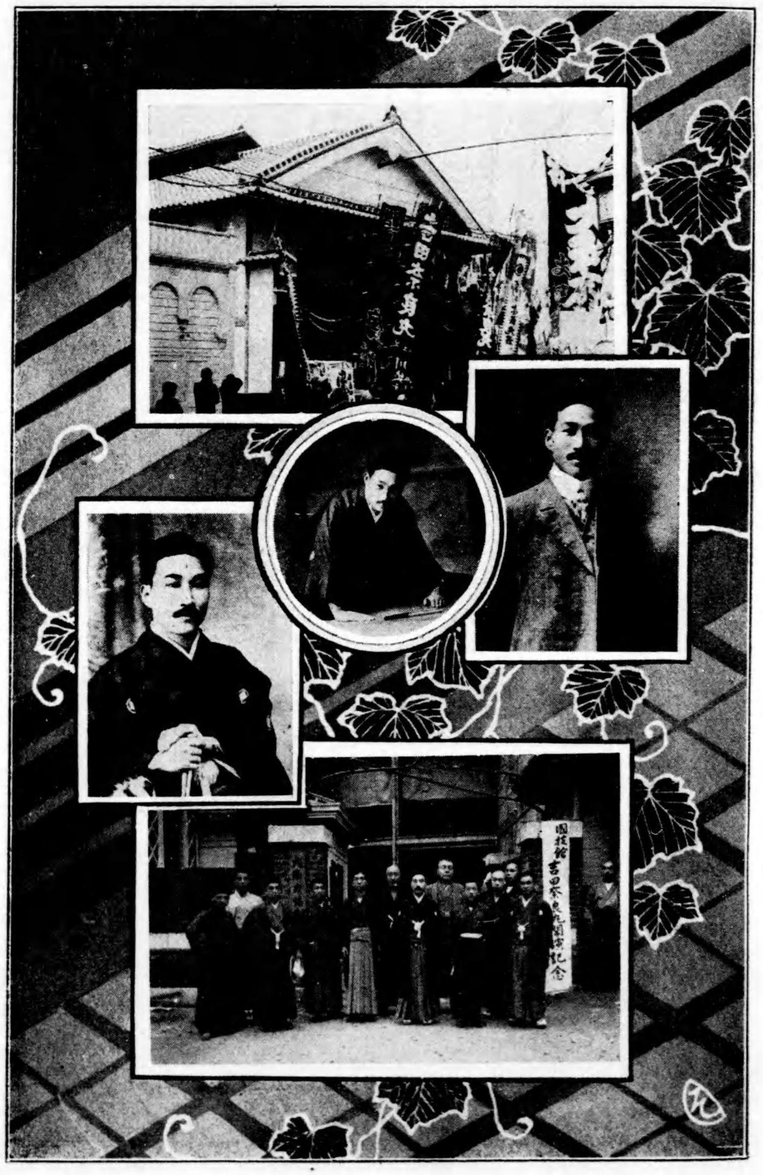
内匠頭双傷の

三月十四日

大阪南區松屋町本社にて

元吉田奈良丸顧問
浪花節養成所主幹
浪花節新聞社長

尾上金城



吉田茶店

おれこそは

編 社 聞 新 節 花 浪

殿中及傷……一段
大高源吾の笹賣……三段
赤垣徳利の別れ……二段
塩山伊左衛門……三段
間重次郎……二段
大石主税東下り……一段
孝子迷ひの印籠……二段
神崎與五郎少年時代……二段
神崎與五郎東下り……一段
大石山科歸り……二段
南部坂戸田の局……三段
天野屋利兵衛……三段

（演題終）

節付の第

◎沈着いた細かいふしー

ふしの尻を長くひく

ふしの尻を上げる

ふーの尻を下げる

○乙の声にて少し早めたふし

、急調のふし（半ば地の言葉にて）

▲奈良丸流の乙ち延ばして放すふし

△ふしと地の詞と半ばしたるふし

×奈良丸十八番のふし

殿中刃傷

節

頃は元禄十四年霜月旬は弥生の中の頃、七重八重咲く九重の、花の都の空よりも、勅使が幕府へ来る着、さてもその日の賄役、内匠頭は長矩公、師匠番たる上野に、賄賂袖金なかりしゆえ、あれやこれやの手遠を、受けて蒙むる身の恥辱、性来短慮の

長矩公、已れヤレとハ、心は矢猛ふをやしど、此顔で刃を抜たなら、家は断絶身は切腹、拵る我が身はいとをわど、残る家中が不憫ぞと、こらへて、たゝ十四日、訪しあらうに、松の廊下の入口で、大侍しやの人非人、禄盗人との、しらを、もう堪ぶと、甚だ忠義の情が切きて、

詞ツー早く

前半にたをさんだ少サ刀に身がかゝる、

上野待てッと

大喝一聲抜きはなち、ヤッと切り込むた刀先も、額の金輪が邪ケ広になり、無念や本懐遂げられぬ、田村屋敷に預けられ、春の夕暮告げ渡る、鐘の響と諸共に、無念の最期遂をすばらり、家来四十七人が、怨も積る雪の夜に、主の仇討参ハ高輪泉岳寺！

大高源吾の笹売

節

世の中を何に譬へん飛鳥川、昨日は人の身の上も、今日は我が身に降かゝる、芸無不実の習ひとて、風雅の道に名を得たる、大高源吾忠雄も、去年の弥生のふゝ和賀、花と散りにし我が君の、怨みは積る芝の下、やわら討いで置くべきと、江戸へ下つて浪華で、賤ごの伏屋の隠居、されど折ひし武夫の、石より堅き真心ハ、時節を待つて殿様の仇討するを楽しみに、春過ぎ夏ゆき秋も暮れ、木々の梢も冬枯れて、見るも哀れや今日今日、晴れたる空も搦き曇り、世界のごとく降りくる雪を、古への、花と眺めん寛の内、雪は降りて静かなる、地に落る鐘の響、諸行無常の響あり、一夜明くれば白妙の

詞「尚もやまずに降ちきる、その雪の中破きた福笹に真の出た、丸ぐけ帯をしめ、」

節（素足に草鞋を穿き、志めまして、竹の束をば撓ぎあげ、清草あとにたゝの、松坂町の方角へ、笹よ〳〵と急がき る、両国橋での賓井其角と出會が何うなろう）

二

節（富士と筑波の山間を、流れし清き隅田川、下は品川大海の、沖で鷗と云ひつゝど、此雲へ飛びくりや鳥の名、粹にかはつて都鳥、ゆきかふ船の姿さへも、白く見えたるあでやかさ、橋の半ばに佇んだ、大高源吾の笹責が、四邊の景色打ちながめ、）

詞「心の中に思ふやう

源吾「ア、世の世であれば今頃は、殿様の麦でさせ給ふ風格ごと、数寄を集めしお園ひに、友と聴えて松風の

音聞き伝ら見し雪も、今日は草鞋に踏みしだく
かゝる姿とは成るも、之皆上野の為せる業」

節（愈々明日と相なつて、討入致しや我も第一に上野の、
白髪首をば上げたうへ、蓮の墓におわします、亡君に
目通りしたなれを、これに優りし愉快なし、氣を取
なほし大高ご、見惚れる折こそ上野東叡山乃、
七つの鐘が告げ渡る）

詩吟「室山ンー雪落つー聲ノーウ鐘
花落ちー花開くー萬々の壽」

節（折から左一所の方よりも、遣つて来ました一人の宝丘、両
國橋での寶井其角と、出會の一幕ごドウなるか、）

三

節（橋の中央に大高ハ、佇み居らる、向ふから、五十九間の大
黒傘、上州紬の長合羽、三寸厚朴歯の高足駄、雪踏

いい、いい、みめめて帰り来る、第場町なる寶井其角、出会頭に

其角「オヤ其雷こお出で遊でしたのは、ゴ業殿でハござらぬか」

詞「こはれて大高は、悪い所で其角に逢ふた、まさか違ふと云ふて、行き過ぎる澤にし参らぬど」

源吾「オー、オヤ何誰かと思へば、家臣殿、相変らずの仕建で、

いち同出たうございます其角「ア、源吾殿にも、相変らずとは申し上げたいが、変つた姿にば成り遊ばしました

地（花も實もなるものか冬木立）

地（源吾はだまつて別れる澤にし参りませんで）

源吾「鐵も凍れる別れ路の霜」

其角「ハツ、夫濃り風雅の道は、お忘れ遊ばやア

なないと思えましたなら、雲の道こそ途なけれ、
つんざく嶮なる風の中、あたりの風景に思惚
れて居りましたわい、然らば源吉殿御免
あされよ」

地（と腰の矢立を抜きはなし、懐紙を出して
すらすらと書いて）

女角「お附けを願ふ

地（とさし出す）

源吉「有難ふござる

地（と、大高は手に受取りて眺むれば）

地（年の瀬や、水の流れと人の身は）

地（と、認めてござりまする）

源吉「有難うござる

地（と、筆を借りてスラスラと書いて）

源吉「其角殿お笑ひ下され

地（と、わき句を附けて渡したから、取り上げ

節（あしたアまアたアちゥーるそのたアかアらア

ぶね、ヤカシチラとなぶめて、カシ寶井は）

其角「ア、、源吉殿何時でもお越下され、行く先きく

の大名旗本衆で貴方の噂ばうり三百石や五

五百石なら、キワト御用旗を頼ーませう

地（と云はれた時に源吉がハ、ア其角は私しの心が判

らんわい明日にもなつたら去良の屋敷に討入

ります、首尾よくも懐遂げたなら蓮の葉

に乗れますと云はんばうりに渡したが二度の

主人を持て寶の船に乗りたいとお取りなす

つたに違ひがない、知らぬは此方も幸ひ

だ、さらばくと別れきたる大高此の夜のお話しは如何なるのち暫く休憩……）

赤垣徳利の別れ

上

節（空は師走の十四日、卍字巴の有様に、降り来る雪のそが中を、身に赤合羽まんぢう笠、こす朴歯の黒駄にて、酒の機嫌の千鳥足、顔も赤垣源蔵で、ブラくゝ帰る月堀の、お屋敷門前となりぬれば）

源蔵「エイ、、浩門番久し振りで浩座るのう」門番「誰方か

思へば、源義殿でござろう」源義「誰方と思はいでし、源蔵でござる、久々で、お先上の屋敷へ通る、お差支へはござるまいか」門番「お通り下され、だが源蔵様、お見受け申せば赤合羽に饅頭笠、殿様の御門なれば、笠丈け取つて、お這入りに預りたい」源義「イヤ〳〵、その儀の事は辯へのない源義ではないが、お見掛けの通り、左の手にも先上への土産、甚ぐ恐れ入るが、内門番、

一寸笠をお取り下さるまいか」

と頼を差出せ

門番「内貴、仮賜るにお取りなさい」源義「ハテ、イヤ、その位の機識がなくては、門番は勤るまい、ヨイく然らば自から取つてゆくぞよ」と

節（左に提げた竹の皮包、門の表庭にやわり置き、手を差し上げて饅頭笠）

詞（ボツキとチギッて大空へビユーン）

源義「門番、之也でも甚謝さるか」門番「まだ笠の枕が頭にある樣でござる」源義「枕があるば晩に寢る時の世話は要らない」

節（アヽ降るはく、カン雪は我毛にて飛んで散乱し、人は鶴裳を着ると云へど、源藏ハ赤合羽袈裟頭笠にて小言を云はる、然らバ御免とヨーロヨウロと、御門の方へ這入るので、徳利の別れの哀れさが、如何なるのか次の段）

下

節（糸のほつれや笠の墨、頭に載く君が恩、忘れぬ種の武夫とは、義理の足元降アうづむ、雪イふみしめて赤垣ゲ、南辛ふた機嫌でとつおいつ、塩山庵者へ帰る道」

詩吟「北向再拜すれば天日晴し」

七度人と生れてこの賊を滅さん

節（建武の昔し五月雨の、空ほの晴き東雲の、スワヤ
寄せ来る賊軍へ、正義の刃振翳ひつ、死して護
国の神となり、生きては興国忠梁の、臣と呼ばれ
て後の世に、名も誉や香はしく、流ふるしの烈
さに、枝て枯きても根を残て、幹は国家の柱そと
今も名高き楠公の、嗚呼忠臣は湊川、楠父る
も忠なれや、君に仕ふる武夫の、忠義に上下の隔て
なし、今雪に迫る討入の、せめて先への今生の別
れ、持て戻つた酒肴、塩山一宮へ通らして、不
在のこと故、着物に酒を手向けらる、先と別れが
徳利の話、如何なるのり、二度の浄瑠璃の読物
なり、先づ是まで）

鹽山伊左衛門

上

節

如意ならぬのは浮世の習ひ、凡そ塵芥が一二丁も行つたらと思ふ頃、帰り来たのは伊左衛門、寒さを凌ぐ覆面頭巾、上州縞の長合羽、蝙蝠の大小手狭んで、こすれ違の高足駄、後に續いた下駄常平、

細鬢奴の波動揺や、紺看板には梵天帯、真鍮造りの煙管差、浅黄の股引紺の足袋、四角の草鞋穿きゝて、饅頭笠被て合羽と纏ひ、帰り来たのは吉蔵先よ

常平「お帰りーッよ。

節

と觸し込む聲に、家内一同は出迎いと技を、合羽と脱いだ伊左衛門、傘を置んで常平に渡し

伊左「老爺、定めて其方も疲れたであらう、今日の寒さは又格別であつた事ぢ」常平「エ、旦那様私はチツとも厭いませぬが、定めし旦那様こそ、お疲れでございましたらう」伊左「アイヤ、身共は少しも厭なぬが、老人の其方ゆゑ、嘸かし困つたであらう、部屋へ下つて寒さ凌ぎの茶碗酒とやら、緩容と呑んで休むが宜い」

常平「ヘイ有難ふ存じます」

節（と、その侍一室に這入りゆく、後見送りて常平は手拭ひ片手に鬱憂顰め、禿たる頭を傾けて）

常平「ナア、乃公の様な端下ない者を、是れ程迄にお情けを下さる、平常に変らぬ旦那様、アヽしてお歩きなさる後ろ姿と云ひ、お言葉の作り方、源義様とは瓜二つ、御兄弟とは云ひながら、アヽ能く迚も様に似なすつたものぢやなアヽ、然し乍ら源義様ハ

幼少な時はあんなお方ぢやなかつたが、お家断絶の後は、お酒の為に身持の惰弱、旦那様は然うでもないが、奥様は至つてお嫌ひになる、源蔵様がお出でになれば悪い顔ばかり、夫を側で見てゐる乃公の辛さ、アヽイヤこんなことを考へてゐるのぢやない、、、、、、、

節（私も余程疲れたやうぢや、部屋へ下つて旦那の情け、、、、一口頂戴仕ませうかと、禿た頭を光らして、己れが部屋へと下りゆく）

詞「此方は塩山伊左衛門、奥の一室へお這入りになつて、お召替をなすつて火鉢の前に、ヤワリと着座する、御家内のお槇どのは」

まき「お帰り遊ばしませ、今日の寒さは定めてお厳しいことでございませう」

伊た「アー、別段疲れた譯でもないが、私の留守中に、誰か来客はなかりしか

まき「ハイ、今日は

誰方もお越しになりませぬが、源義様がお見えになりました」伊左「オ、ナニ源蔵が来た、ア、左様か、暫らく姿を見ない故、至つて酒癖の悪い奴、若し間違ひでも起したのではないかと、云はず落らず案じて居た譯だが、ア、善事で帰つたと聞いて先づ安心、然らばチョイと此處へ呼んで貰ひますやう」まき「ハイ、アノ折角でござりますが、モウお帰りの御容なでございました」

伊左「ナニツ、モウ帰つた、ハテナ妙事になる、今日の帰りの早さ、シテお前は貪うて遣つて貰れましたか」まき「アノ、妾は持病の癪の為に」伊左「ム、ウ、貪ふことが出来なかつたら、ハテナ其方は妙ちやのう、何時も源義の娘を度には、持病の癪が起るぢやな」まき「イエ、今日ばかりは全くでございます」伊左「病気とあらば仕方がない、誰も貪てびか」まき「イエ、アノ下女のお杉がお目直

りをした客までございます」伊太「何、杉が倉うた、
ア、左様か、夫れぢや杉をチヨイと呼べ」

節（と手を拍らす）

節（玉常は別に倉へたいとも、何ともお思いなさらぬが、
兄弟のまことの情が通してか、今日に限つて慕はれて、
思はれてある訳へお杉は）

お杉「ハイ、何の御用でございますか」伊太「別に大した用
でもないが、今日不在中に源蔵が帰つたと云ふではな
いか」お杉「ハイ、先程までお待兼ねでございましたが、錬
り旦那様のお帰りが手間取りましたから、遂今し方
擦れ違ふやうにお出ましになりました」伊太「然うか、
ア、何うせ此寒空に、又詰らない服装でもして帰
つたであらうのう」お杉「イエ、ところが旦那様、今日は
大層なお服装でございました」伊太「ナニ痩浪人の

冠上で、立派な扮装とは……」と、「今までのやうな、
垢染み着物でなく、又お鞘の剥げた大小刀も差し
遊ばさず、今日はお小袖の二枚襲に、献上博多の帯
をお締めなさいまして、夫きから朱鞘の大小を
立派な大小刀をお差しになりまして、酒と肴を携て
お兄様に立見酒を頂きたい、心ばかりの土産だと、こん
なに仰せられまして、床の間に置いた徳お帰りでござ

りまし、旦那様のお衣類を旦那様だと思召して、
お酒を手向けて頻りに何か、一人芝居のやうに泣たり笑
つたりなさいました、で残し置く酒肴は何うぞお兄様
に頂んで一口でも、寝酒よ飲んで頂いて笑れ上、笑ひ
頂む浪々中は、大変いお世話になりました、死しても
忘却致しませぬ、切めてお宅なれば一口頂きたいと心
得たが、今をずに帰るハ返へくも残念だと、べらハ

平常になく、ボロ〳〵涙を流してお在でございました」

中

節

「聞いて塙山伊左衛門、弟思ひのお方ならいつも冒氣な弟が、今日に限つて衣物に酒を手向けて憂ひを慰した、合点の行かぬことである」

伊左「ハテ、その時に何か云ひ残しはなかつたか」

西國遍の大名に召抱へられた、源義真人間になつたから悦んでくれと、新様に作せでござりました」

伊左「黙れつ、二度の主人を持つて、真人間になる奴があるか ム、ウ」

節

「合點のゆかぬ彼奴が振舞ひ、酒さへ飲めば他愛ハないが、二度の主人を持つやうな者でないとハ思つたが、こゝもわが身の過りか」

詞「身共の紋付に酒を手向けて泣いてゐた、これも合

黙が参らぬ、コリヤ模をなたは病氣で是非がなら
つたが病氣でさへなかつたら、一目會ふてやつて呉れ
ましたら、云ひたいことしもあつたぢやろに嘯」と
（是れが下方の通常の人なら、女房かまきを揺て、
我にも一人の弟なら、其方に取つても義理の中、然
うしたものでなからうと、愚痴の数々列べしやうが、
流石は塩山伊左衛門、グツと耐へる胸の裡、云いぬ
は云ふに泣腦ず、俄に変るその容子）

伊左「あゝ、左様であつたら、二度の亭人を持つて兄に
安心させんと帰つたのであらう、ヨイ〳〵杉、其方は
下れ、又まきし病氣中、居宅に下つて宜しい」
「有難ふ御ございます」と、両人が下つたその跡で

節（源蔵が残した酒さかな、一杯飲んだが美味くない、

その後一室に送入られて、枕に着いたが落つかぬ、夢にも見ぬ幻は、源蔵がよろく酔ひ機嫌、帰る姿に十分寝られず、寝られぬ後に物おもひ、二度の主人に有つくとは今黙ぶゆかず、心の底よで腐つてをらぬと思つたが、これも泡沫さびしきや、然はさりながら、今年六月中旬頃、正常のごと酩酊いたし主帰り、基而で腕を枕よ高鼾、中刻下つて眼を覚し、杉や小と命じた時、源蔵湯呑をとらぬ内に、杉がお盆を下げたゆゑ、急ち湯呑は杉げ落ち、小は飛きて着物は濡まる、其時枕者が次の間で見ることはなしに聞いて居たが、ムクくくつと飛ね起きて衣類の方から先に着るかと、思つてゐたら然うでなく、刀の方を取りあげて、中刀に異常はあるまいかと、鞘口三寸寛げた時、確と抜

者が見たなれば、外の造りは悪いけど、中身は水の垂るやうな氷の刃、ビシヤツと鞘に納めたで、意胸すかと思へば然にあらず、言葉祝めて「コレお拙者ぢやからに是で宜いが、他人に会釈はならぬぞよ、呂使ひの粗忽は之の落度ぢや、今日は志をてらす、以後は氣をつけよ」とヤワリ言ふて帰した言葉の内に、忘れて遣らうの一言はチヨと通常ぢや出ぬ言葉、また中身に錆のなりつたのは此奴主の武士ぢや、底まで腐つて居らないと、安心したのし水の泡、二度の主人を持つたとは、ア、情けない心ぢやと、「思ひ回せば回せど、心は更に休まらぬ、ア、我ながら思痴なりと、心付いたる夜半の頃「雷折れ笹の物音に、驚うさしてドキくく、俄に起る胸騒ぎ、夫をも道理の今頃は、血肉を分けた弟が、

頭字その傍に、赤き心を現して、君恩の為め討死と、死骸の上を飛び越えて、獅子奮進の勢ひで、鎗と肩る真最中、先に生きた塩山ぢやもの、何の寝▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲らをして堪るべき、然うかうする間に五更の天も明き渡り、東雲告ぐる庭鳥、チユウと鳴くのも赤垣の、まことの道を歌ふなり）

詞「折から窓の下を駆け出す大勢の喫驚音ウワーッ〳〵」

節（さても之より下敵の常平、赤垣源蔵が四十七士の中に混ろう混つてゐぬう、此度で二度の別れの慈嘆ぢやが、塩山伊左衛門の一節は、之にてお暇仕つる）

間重次郎

一

（節）世は徳川のー水清よーく、その源の澄み渡り、
こゝ葉あーおーイーが、此霞彼雲ウー、繁げる常盤
のオー木平、枝し吟らさぬ深みどり、緑り紅ていこ
きませて、錦と見ゆる武蔵野の、千代田の奥に
從へえち、萬代動かぬ城の名も、紅葉山は鶯
羽城、朝日夕日に照り輝へし、花のお江戸の八
百八町、有るが中にも鉄砲洲、此辺は淺草の上屋
敷、數寄を凝めしお庭先、朝な夕なのお手入れ
に、今日しも植木屋六蔵が、松の手入をして居
る内に）

詞「如何なる途端でござりましたゝ、足場が外れて

柱より、下へがら〳〵ドーン、と落ちたる下に、南京古渡りの植木鉢がありまして、木の盆栽が滅茶苦茶に成りましたから、足軽共が出て来まして」

足軽「ヤイ六義貴様は飛んでもネエ事をしたナ、殿様〳〵、何と中澤を殺して」六義「何とも中澤がござりませぬで、冒涜お許を願いとう存じます」足軽「憚りながら、太閤秀吉公が朝鮮御征伐の際に、朝鮮を城ち

分捕を殺した、古渡りの鉢を破つた日にやア、殿様に中澤がないぞよ」

詞「と、かやく申えて居る、後の方より現れきたのが、伊佐事方の間重次郎光興が、不憫と思し」

節（殿様へ命をいを遊ばして、六義の命を助けた計りで、淺野の家が新発の後、植木屋六義が命に替へ、間新子を助けるの、いとゞ憫きの

端緒が、如何なるのか、、、、、、次ぎの段……）

二

詞「植木屋六蔵ハ、思ひも寄らぬ粗忽をして、色青ざめて居るところへ現れました間重次郎光興が」

間「六蔵、其方はとんでもない、無礼をいたしたナ、[illegible]し、植木鉢と人命とは替へられないで、殿様へ過誤をして遣されで暫時相待てよ」

節（と、重次郎早速殿様のお目通りを致しまして）

間「恐れながら、御前只今は大切の盆栽を取片付けんと致しまして、重次郎誤つて手を滑らし、石に当て粉微塵と相成りまして御座りまれ、重次郎の粗忽幾重にも御詫ナ、申上る儀でござりまする」

節（お聞き召された長矩公、大いに御怒りかと思ひの

外）

詞「満面笑みを含ませらんて」

長矩「重次郎」　間「ハハ」　長矩「生者必滅ぢやのう、形ちあるものは何時かは壊るゝの習ひぢや、今日計りは忘れて遣れ、以後は必ず慎みてよからう」

節（名将の下に弱卒なしとかや、斯る聰智なる人の、家来にありし間なら、一身犠牲に供し、願ひ出でたゞ、漸〳〵に御前腐にとわ成りまして、下り来まして植木屋に、モ儀を出せば六蔵は、喜び勇んで軽子橋、跡に眺めて立帰て、此大恩を忘れもせに、朝夕なに、浅野の武運長久を、祈りました甲斐もなく、夏きを昭ひの世の中の、花一と時の眺めかや、まが殿中で刃傷致し、浅家断絶した後は、植木屋六蔵の住宅へ、女房悴と預けて置い

て、國の赤穂へ馳せ付けける。

大石主税東下り

（中仙道の道中付）

節行くを限りの逢坂や、関路を後に大津駅、誓ひは堅き石山の、秋の月さへ鏡所に見て、小波寄する湖水の、飽うぬ眺めも東の間に、草津の里も早すぎて、守山さして野洲川を、渡る心もあからで、もさきこ京家に休息いて、越智川越えて高宮を、多賀社とは

知らねども、手居なより伏し揮ふ、馬場醒ヶ井柏原寝物語りの美濃近江、不破の関屋は荒れて、名のみ残る関が原、野上の里をかけゆけど、人しからざる旅にだに、笠も垂井に来ぬれば、抗瀬の川の渡し場で、岐阜の古城は何変ぞと、昔を偲けども取りの、噂も今を美濃寺と、河渡の川をうち渡り、加納の宿に假寝して、明日は移住に太田川、両人ふ

す方の旅ごろも、伊吹嶽ぞと、細久手すぎて大久保の、末は大井となりぬらん、歌の心は知ねども、西行庵を東なり、中津をさしていそぎ行く、美濃路を信濃の国境い、落合ひ過ぎて登る坂、十国峠と萬てしる、まごめの里に委せつゝ、妻籠の為にもあらねども、祝をこゝ留野の心せき、野尻須臾の後の世に、名を上げ林や福島の、関の戸さしの遠近に、

一夜宿りをおむらん、寝覚めの床の現にも、かの浦島の玉手箱、開けては惜しき榮華の煙り、消えて累なき夢の跡、重き恨みを身に乗せて、本覚の樣なよくゝと、命をからむ夢かづら、軈て拂ふ宮の迹、藪原越えて多度坂、峠の風は奈良井にも、寒さを防ぐ貂川や、つもる思ひの白雪も、知ることを花の心なれ、武士の筋ハ櫛澤、重む次安の塩尻や、諏訪の湖小

下に見て、和田の峠の上りおり、前ぞ長窪口も暮き奴、岩田の宿り如何にせん、今宵は時雨の望月と、鹿毛し月毛も名馬にて、八幡の神を伏し拝を、世ろに浮ぶ大丈夫が、剣の舞を爭ひし、川中島の古戦場、ん殘して姨捨の、田毎の月の影さへて、見返る空を飛ぶ雁の翼を近して口の本と、過ぎてとこよの国や、でも、蓑とハ高き事村の、二つ雁金ハつの殘、苦が

たりを耳にして、千曲の川の中樽を、渡りてこゝを
越ぬると、たゞ名づけてや岩村田、稚遠らぬ驛の
名は、敵きと見れば近くの、望こは高き濱ゐなる、
焼る思ひを押し鎮め、進めるまゝの轡井沢、碓氷の
関を、越えぬるこゝは、近ひの人や坂ちに、我きを松井田
岩中の、板鼻後に微地、夜明けを告ぐる烏川、
さて高崎を過ぎゆけば、先は新町東方ぞと、冨部
を思らす日の光、渓谷熊谷の里も、早や櫛川に
終りきて、上尾も高き大宮の、草より出でし陽影も、
今は屋根より屋根に入る、軒と差べさ八百八町、百万石
の御城高し、出家武士諸商人、神振あをれ知る君は、金
のなる木の植えどころ、ふ代田の国に徳川の、流きも
清く澄と流り、今を盛りと咲き匂ふ、花のお江戸ぞ
着きにけり)

孝子迷ひの印籠

一

節（鬼をも挫ぐ大丈夫の、矢竹心も曲者の、慈にて遠ふ
横ひとて、茅に新茂田の内家中に、郡奉行ハ中山
の、家にきたなきを改、若氣のをりといひながら、
親の諫せし遂しをば、切つて棄せし夢田巷の、いとど
哀きなの事を業て、朝に源氏の友を呼び、夕に平
家の君遊ろ、浮き川アーの賤女を、そのかしての
鹿島ぢち、駆けつ廻りつ國をへ、島が崎くてふ遊
の、芝の色りの濃紫屋、男や関守の年過きて素
養金の愛息、最とすこやかに生たちの、己が頭字其
侍に、名を安吉〻呼もりて、蝶よ花よと育てし、
浮世の縁に逐てきて、再び出でを遂ひ出で、

住吉宮めぐり流浪の、外べ〳〵の宿の假枕、宿は數多に轉きどし、同じ浮寝の旅の空、苟且なもらぬ疫病に、妻は寡らぬ死出の旅、殘されし初吧の、里手塵ひと業りつ、尾羽打からす浪人の、泊り〳〵の村雀、廻り廻りて十年目、心ならずし故郷の、越路の空に奉ひ戻る）

詞「越後國新發田の郷、田中村の入口へ參ります

と、成る掛茶屋があります」（茶屋）

安太「老爺さん紹せよ」　老爺「ハイ之れハマア旦那樣、可愛らしい坊樣をお伴れ遊ばして、能うおあで遊バしかした、サア〳〵何うぞ此方へお這入り下さいまれるやう」　安太「ア、チヨイと物を尋ねるがナ、是ハ五郎の在の田中村とゐふのか」　老爺「ハイ、御セの通り、田中村でござります」　安太「此里に百姓太兵

衛と云ふ、老爺があるが、其方承知致し居るまいか」老爺「ハイ、太兵衛、エ、太兵衛と云へば、此の村でハ三人ばかりございますが、何の太兵衛でございますか」安太「今をゝ去る事十年ばかり以前、新発田の城下へ、奉公にあでました太兵衛ぢや」老爺「アヽ、その太兵衛でございますろう、夫れなれを旦那様此の村でも相当に暮して居りましたが、難の下の太兵衛と云ふ老爺でございまして、さしたる悪事も仕ませぬが、何う因果の廻り来ましたものか、悔にも先立たれ、孫には死なれ、野中に立つた一本杉も同様となりまして、新発田の城下で、長い間武家様の屋敷へ奉公に参つて、少々貯ひ溜めや、お給金を溜めて、その村へ戻つて参りまして、以前の通り、エ、水呑百姓を致して居りましたが、不幸

にも二年の以前、三年の罪魁、今ではまた、他人
はも老爺となつて居りまする……アヽく、アレ旦
那様御覧なさいませ、向ふから参りました、人事
言へば影とやら、彼れが太兵衛老爺さんでござり
ます」

節（聞いて中山安太郎
安太「さ、た様であるか」

節（と伸び上り）

節（能く〳〵見れば、田圃帰りと見へまして、泥土の塗
れた着物、縄の帯に、織ない手拭で頬冠り、賓
乞虐のやうに日に焼け、腰に鎌をさし、鍬と
撫けてヒヨロ〳〵と、畦道伝ひに帰り来る）

節（通り掛りに中山は）

妻「アイヤ其處へ行くのは太兵衛ではないか」老爺「ハイ、此樣な處で私を太兵衛老父爺と仰せ下さいまする旦那樣は……、オヤ貴方は坊樣ぢやアございませんか、アー變つたお姿におなり遊ばしましたナア」

節（茶屋の老父爺は驚きました）

老父爺「人を馬鹿にして居る、坊樣もないものだ、坊樣ぐ坊樣を連れて來るものか、何處の若樣う知らないぐ、

錬程困難しなさつたもの」

、、、、、、、、

と思うて居りまする

安太「老爺や、お前も錬程年齢を取りまーたのウ」老爺「若旦那樣、私も年齢を取りましたが、貴方もお變り遊バーました、大体其樣な御姿におなりなさるのも皆な罰が當りましたのでございますぞ」安太「イヤ、其方の言ふ通り、親の諫さぬ不義放蕩をーた故に、

所謂親の罰が當つたのであらうぞよ」老爺「イヤ然う
ではございません、お父様の罰もありませうが、大体ハ
貴方は奥さまの罰が當つて居りますぞや」
安太「ナニツ、其後ハ妻は何方へか、嫁入りを致しましたか」
老爺「サ、サ、其様な事を仰しやいますから、貴方に罰が
當るのでございます、今更申上げますのも繰り言の
やうでございますが、新発田の御城下にて、今堂玉
だ中山安右衛門は、美男子だと云はれました貴方、お
年の若いばッかりに女好みと遊びて、且那様は心を碎
き、彼方に頼て此方に依頼して、彼男の娘ばトみで
ある、此方のお嬢様は如何であると、懇談頻に極めて見
ましたが、彼男は嬢ぢや呉そとは嬢ぢやと仰せらるゝま
する故、遂に主君様に申上げて、御主君様のお嬢今
で、お指南番にて三百石」

節

（菅野の旦那のお嬢さま、貰い受けになりましたが、ミヽ九度の祝盃を濟まし、親族一同お祝ひに成て、愈々之れから夫婦仲好くお暮しと、思ひましたるその中に、貴方の姿が見へなくなる、夫れ故手を入れ調べて見たが、机の上に手紙が一通、擴げて見れも沙思あつて旅立ちをする、宜しく頼むとばかり故、父上様の御心配は一方ならず）

節

（菅野の旦那の御意腹は如何ばかり）

節

（嬢の八重を伴きて来て、三々九度の祝盃濟ませ、首尾能く語らひもせず、其侭逐電をすると云ふのは、定めて嬢が氣に適らぬのであろう、サア今から嬢を伴れて帰る、お八重来れと手を執って帰らうとなさる、其時中山の旦那様は、菅野先生の前に手を

文（へ）

中「大体悔の身持の悪いとゞふのも、親の仕込が悪い故、今より我よの作方を早ね出して、貴方の前に引出し、首級に致して御覧に入べきまする故、何卒三日の間お待ち下さりまするやう」

詞「と、頼んで見ましたが、一敵短慮の菅野様、いつかなお聞き入れなく、娘を連きて立帰る、今理に引ずつても帰らん詰りの勢ひ、其時お八重様は菅野、野の旦那の神に縋りて」

父「もし阿父様、何時も貴方や母様の御教訓には」

弟「女は三界に家なしぢやそよ、幼い時には親に従ひ、嫁しては夫に従ふものぢや、老いてはこに従がふのは女の常　此度当家へ参りまする前に、母さまも貴方様にも浅揃へてコリヤ娘、今より中山家へ嫁ぎを致す上からは、理中なくして立帰るハ、汝

の氣使ひはせぬぞと返すがへすがへの内諭

節（受けて當家へ歸りし妻、一旦視察せし上は、天地の間に夫と云ふのは、安太郎樣の外にを更になし、夫の旅を出せし跡を留守を守るは妻の役、今貴方と共に歸り、後に殘りし留守樣、お年齢を取られた身の上で、若し疾病の業りしせば、醫藥に事は缺うずとも、夏又き節氣ふきせの習ひ、お心に適をぬ事ども、唯あるらんと案じまするし、其時夫に代りお見取りするのは妻の役、安太郎樣ぞ、お帰りに相成つて、汝は家風に合をぬ故、暇取らする、帰きよと仰せあそばす夫までは、此儘置いて下され）

節（と神にすがつて泣いた時、菅野の旦那も、日頃の癖癖も何處へやら、ヒタリと後にお倒きなさして、斬し無言で神後る）

神崎與五郎少年時代

上

（節）諫鼓苔深くして鳥おどろかず、さても赤穂の名奉行、神崎與五衛門の一子にて、こまが與五郎は父に似ず、生れついての愚り者、今日も又吐供に連出、子供心よ魚釣りせんと、己が屋敷を跡に見て、上方へ

なのがらも見流せば

（節）春の日和の長閑さに、野山の色は碧ひて、草も木々も美き色ひ、多の聲さへ疲うに、吹くや川辺の柳に、靡くと見えてまた返る、緑の花の末枯ハ、鏡の淨化粧、黄金色なる葉の花に、心ありげ春ふ胡蝶、春の錦を纏なして、かるさも輕きその翼、天津乙女の羽衣も、かくやとばかり思ハ

▲▲さて、恵をくゝも面白けきど、馬鹿の與太郎にや判り
やせぬ、お塩湯にて腰うけて、釣らんとすれど魚ぐ来ぬ、
かなた見るなら百姓の悴庄吉が、釣つてはうあげ
又釣る始末に、彼吉は塩ぬがよいのぢやと、代つて
見たぐ下手ぢや故、餌をおくばかりまた代る、終
ひの樣にて腹ぐたち、庄吉の胴丸籠に投げ棄
てゝ、魚釣竿を真二つに折り、嘆く庄吉捕へて、
屑問を用ゐけて釣竿で突く、何塩らゝコロくく、
屑問ハ礫を血は滲む、已さとばうり庄吉ぐ、さて
も之からドウなるか）

下

節（庄吉はそれと陰から暇告げ、母に別れて小刀懐
中、駆けて来つた廣野原、與太郎の所在何方で
と、花に問つども白妙に、嘆き亂れたるハ重樣、

雲も霞も煙も立て、いづもが花の精かと、見てし
判たぬその下で、稚古に心を染め手繰、ヒラリ跨る
鞍の上、青龍白虎の四つの腿、振りたてく乱き髪、
尾は青柳の如くにして、法に合して乗るときは、千
里の道も遠からず、躍に夕べの雲を踏み、息にハ朝
の嵐を吐き、いかなる山川巌礁も、逆捲く海上の
荒浪も、降りくる雨のその中も、自由自在に駆け
巡り、大将討んとする時は、前を後陣で蹴倒し、
宛然人なき野を行くが如くぢやが、一寸の虫に五
の魂、乃公の眷中に心の悪い、生意気なの小僧よ、
動かすなら動かして見よと、ヒインと抱ねゝで与太郎
が、頭を一つ打つに、真一文字に突起つた、與
太郎ハ今にも落んとする、
「駒が雪のは花が散る、
昔ぢやと庄吉刀を抜き放ち

左吉「若様、頭を破られた敵討、実ざ尋常の勝負あれい」

節（ごふよりザクーリ、短刀掴まで通れとさしたんだ、道に興た郎を差殺し、所詮逃きぬ我身ぢやと、切腹せんとする、さても左吉志の一席は、又深演ばる）

神崎與五郎東下り

節（七重八重さくウー九ウのへの、花のみやァーこゥーの序急ぶり、七月のぺるてふ高く山科を、アトに眺めて神崎が、神のゆりアの四の宮へ、心を止めて行く、先きは、高く恨み重なるて吉良上野に、少しも早く逢坂と、名のる殘さる関の戸の、日足も瀬

田の長橋や、深き思ひは琵琶の海、撃に眺めて草津に宿る、朝の霧、露の命と覚悟して、逢は夢路の夢の宮に、着いた雲は東海道、道の難所ハ箱根山、甘酒茶屋となりぬれば）

神崎「婆さん詰せよ」　婆「コリヤ、マア、旦那さま、茶屋をしお厭ひなく、よくお出で下さいました、其雲は端近、ドウぞ此雲へ、お這べり下ざいますやう、神崎さ

イヤ、却つて中に這入ると、表の床机を借り受けて、四方の風景を見て、一杯頂戴して口の在る間に、小田屋迄下り度存ずる故、酒肴をもて

節（心得出したと茶屋の老婆、持ち出だす高くれ猫足膳を前に置き、相手なければ獨酌で、顔にたんの上り樣色、ちらつく眼元で四方の風景を見渡せば、遠かあたりの奥帆浮帆、天の水鏡の此雲かしこ、江

傳の松原清見寺、志ばし眺めて居る内に

（武士の大和心と其ゆゑに、姿に見する富士が峰、
積りし雪は手早振ふ、神の御代より解けしためし
のあらぬうと思ひ浮べて望の御積城の稚こそ
尊けれ）

神崎「婆さん」婆「ハイ旦那様」神崎「此富士を見て誰う歌
でも詠まんした人があるか」婆「ハイ、一度昨日でござう
ましたが、西國の旦那様が、体みなさいまして
歌「只見れば、扇擡げて倒しまに、雲は解けぬ
富士の白雪」
詞「と詠まんしてござります」
神崎「ナニ、雲は解けぬ、と申したり」婆「ハイ」神崎「ウム妙
解けぬ恨みは富士の山よりも」婆「エ、」神崎「イヤ何で
もない、ハ、ハ、ハ」

節（何時うは解けるむねの白雪）

節（雪をそゝぐと云ひ始めたも「今稀山に匂もが、

雪ぐ恥屋の雪ドやけな、思い直して思直せば、

行手の方は雪の水田原、湯本の宿、産頭、軒ばしや

アーセ始り高百里に仙たる百ちの建方ず、登り来

まし、馬方は、命の頃、なかふ三十五六、身体二面革紙

のぬく、馬の把縄を肩にかけ、登り来ました馬方が、

茶屋の表に歩みを止め）

馬方「お婆ア居ねンねェよ」婆「アラ、丑さんじゃアないこう、

此の間からちつとも見えなかつたど、何変を忍ろくは

ないだろうかと、大変心配して居たよ」丑「有難イナ、

お婆、叩き殺しても死なねーよーな体だから、健な

らねーのは寒の間だ、丁と踏つたら半と出る、鞋と

踏つたら丁がでる」

節（お茶屋の表にさし掛つた馬方ぐ〻上げて馬の把綱を杭ぐ杭に、寄り付けたるそのまゝで）

馬方「お婆、久し振りだナ」婆「マア、丑さんぢやないかね、ち前ちつとも見へなかつたわ」丑「お婆、暫らくだつた、金ぐありやア直に拵つてあげるんだ、銭がないから、濟まねエが一寸一杯貸して呉んなな」婆「丈ぢや丑さん、お前金さへありやア拵へ隙のいゝ男だから、サアお飲みなさい」

節（持つて来まーた一杯の酒をグーツと呑を干した微醺機嫌で横合を見ると、神峠の與五郎う控へて居る）

地（前にヒタ〻と近寄りまーて、揉まで中腰、目付の悪い悪五郎ぐ、ぐつと與五郎を睨みけ）

丑「旦那湯見受け申しやア、ぎの様よ……、小田原迄の帰り馬、一帳場お乗りなすつてお呉んなせい」

神峠「振角だぐ、まぐ見れ癖きては居られぬ、をつて来

ハ馬に乗る事が嫌いだらう、鞍を敷き」　丑五「ナニ、
馬が嫌いだと、よしやアがれ、此のトンチキ奴、町人や百姓
なら、馬が嫌いだとぢやア受取るかも知れねーが、一ト
半ちの人間を捉まえ、馬が嫌いと吐しやー、
笑ひ草もねし、サア覚悟しやアがれ、コン畜生ここ
地（と傳に近寄る神峠に、あらしぬ手拭を敷き
故に一徹短気の奥さ迄なら「刀の柄に手をかけて」
裏二つに殺さうか、とは思ひましたが、イヤ〳〵さうぢやア
ない）
節（大事を抱へた身の上なり、こんなものでも切り殺せば、
取りも直さず罪人と、大事の前の小事故、腕を押へた
神峠が）
節（濡れ濡れ文に五両の金を付けて、濡れを殺せを弱身に
付込む丑五郎が）

五立「さまア見やアがれー、高生、行先は氣を付けて行け
お婆帰りに勘定して上げるぞへ、じやアーおつく行ふ」
地（と来た把縄と解いて）
節（馬の把縄をぱっと掛け、肩で風きろタンカ切る
▲▲▲▲△△△△△
送り節「箱根エー八ィ里イーは、アー馬アーでエーもオー越ー
すゥーゥーがアー上」ハイ、ハイハイー
しやんこ〳〵

高く節（でー下り行く、後次安を見送つた神崎與五郎は、美巻
の姿泰然と、心奥山吹き荒ぶ、風ぐ持て来る青龍権現
の滝の音、逆巻く波を押し静め、江戸へ下つて幾多の
若衆の中奴やあも、本懐遂げし仇敵の、此の評判が津々
浦々に鳴り渡り、噂に年も早や越へて、元禄二八の年の
春、高く鳥の啼くてふ東路の、花のお江戸を跡に見て、
筑後柳川内家衆の赤松高く清た衛門が、國へ帰る

途すがら、宿りし夜半のつれづれに、ほん陣に泊つて人を集めて義士の功績を語る、今の宿の婆さんたち夫の方で神崎與五郎が、忠義の雄を討ちとつたと聞いて、馬鹿の亜ちゃんが、こんな忠義なる旦那なら、アンナ無禮をするのぢや無かつたもの、免して下さいと、お詫して丈と伸びだらる黒髪を、刈り卸して出家の姿となつて、東へ下る、神崎與五郎のお墓の字に篠谷たすし）

夫き人の性こそ善なる者なり、

大石山科帰り

上

節(敵を欺くーそが為に、京の島原かたぞみや藝者
まろ袖を右左り、酒池肉林の楽しみも、銘酒を呑むに
いゝ、いや勝ろ、つらき思ひの内蔵之助)

地(今ワしも島原アトに見て、山科さして帰る道)

節(都の空の春景色、霞棚引く東しイ山ア、祇園清水
長楽寺、浮世の外の華頂山、夜る咲く花も円山に
行くも帰るも花と花、咲くも花なら散るも花ちりて
ちーはアかたかきーー夢の跡、浮き身を扮そ苦しさと、
誰に語らん語るべき、人もなかければ吾と我、なほも
狂ふて狂乱の、浮き面白き千鳥足、よろオーしと)

詩吟「田狐をオー逐はんシーーとしてエー虎を高く原野

にゝ放つウー、此のオー殘骸イー其の身をこびず」

節（さてもミ條の橋の上、まだ寒からぬ、春風をそよ〳〵うけて佇みの……）

下

節（鳴呼行く水は鴨川の、真砂の數は尽きるとも、尽きて尽きせぬウー武夫ウーの、恨みは積もる苔の下、やわらいで置くべきと）

地（思もず掛けた刀の柄、あたりに人目もあるなに、知られて大事と又取り直し、以前に帰る内義の今、注意の橋を渡り詰めたは、妹の別とのきぬぐに、又も栗田の森うげに、ホーホケキョーと鶯の、うら〳〵とふきロを、日の冥峠も来の間に、心山神浪宅の心ぐ使ゝ家に立帰り、大恩受けた母親や、可愛妻子の二人をも、但馬の國に追い出して、東下りの用意に

と味方一同の心をためすその為に、偽せ連判を認め、親子二人の血判捺いて、山科表の味方一同へ廻して見たが、心変りの人がないでやきもきひと、頃も元禄十五年、旬はきく月半ば頃、山科路に大石が、東下りや最後の評定、両国橋での熱揃ひ、四十七名が月雪の中や命の捨て所、表良の庭表の捨べりこが……

南部坂戸田局

一

（節）

手を覆へせば雨となり、こゝを敵へば雲となる、叢裏反覆常ならず、ヤン類を誰きは人心とは云ひたら、お家さうんの當時にも、殿の寵過流らず、詩歌管絃や月雪花、お家の大事を身に

受けて、文武両道よく嘗び、誠に純臣忠義と、殺し
治身し美涙まれ、之勇三千石の大黒柱と云はれたる、
大忠臣も斯うなるものか、江戸へ参勤遊ばすさへし、
一人年目にて自らに、お含いくださること何樂しいとも思
召し給へば、國で治身と別さるが、生来の枝を刈
く思ひ、治り重ねて鉄砲洲、御到着のその上でも、
國からの手紙が参りしか、内義の手紙は無いかやと、
日々御待遊ばされし、若し書状のある時は、家来
の者をも待ち給もぞ、自ら御開封を遊ばされ、
内義を病気であるまいか、無事であるかと案じ
つゝ、御覧遊ばせ端だよし、風邪の為に心地常な
らずとある時は、少しも早く全快と、神や佛に
祈誓かけ、之が家来を逆様にし、まだ夫れのみ、
去身弥生の中四日、田村陸奥の庶前で、家来

冥源五左衛門、今生のお名殘御目通りを願さき
た時、こ世やこ世と契つたる、妻や御舍弟大学様
にを、成のお言葉もなく、汝一市は殘念ぢやの一言
は千萬年暮でござらが、女の身でし妻は、晝夕
忘れたことはなし、況して忠と峰をしわ身ぢやし
の、仇討やめた止まつたとは偽りの、元宮女は心の淳
い者、若しも大事を洩さきてはと、包み居らるに

違ひないが、妻し淺野の後室なるぞ、善と忘き
はなじ居る、皆まで云ふになじぬで、ほんに言葉
の謎にでし、ぬつだ一言内蔵助殿、削して給へこの通
りと両手合さんはうなり

（後室ヿ四邊に目隠りの者あれば、人掛ひでし但しは別
室を設しませうう、如何にしと」

節（云はれた時に大石は、胸に燒金三寸釘、八千八

蒲団にゆがぶ、死ぬの田長の遇ーみル、今の我方と
ちき較ゞ、胸は張裂くばかりなり、この行先が一
寸一息）

二

節（泣聲かくし大石が、涙見せぬの苦笑ひ）

内蔵ハ、ミミ今となれば、如何様に仰せ下さるとも、到
底も仇討を出来ぬさび、イヤ如様なる事だとなじ
ましたら、今年六月中旬味方の者に連絡を通せ
のぢやなかつたが、されば今から山神へ一先づ立帰り、
再び味方の者を集め、若し討ち取る時節しあ
らば、御年念晴しを仕ませう、心得違ひの内蔵
之助、重々お詫を致します、久々の内目通り絶の
お話し對手となぶましたが、只何となく面目なく
なぶますれば、暫くにてお暇を申し上げます」

節（と暇を述べて起たんとすれど奥方様　堪り兼ねたち
白き明二重に顔を蔕て）

後宮「恩を忘れた人でなし、そうまでの此の世でハ會ひませぬ

詞「云ふたと思へば、女の狭い心から、俄に苦しむ持病の
癪、ムウーン　ここと仰向けに倒きて七顛八倒、女
中達は」

女中「あるし奥方様、御基様」

詞「と今抱いたす」

節（心を後に奥方の、心借むる病気より、言はずに帰
る内花吹、次の一室で襖越し、片手を手をにハラ
〳〵）

内室「アッ、人に見られて一大事」

節（俄に変るその素振り、何ときこの夜ぶりけたなど、

宮しき御沙汰を申さんと、玄関の方に行かうとする、折から背後の障子を、サッと開いて ツカ〳〵

戸田「内蔵助様斬るく」　内蔵「オー、オヤ是はお筒の戸田殿ではござらぬか」　戸田「只今貴方、奥方様の御目通りで仰せ遊ばしたのは、アリヤ全くでござりまするか」

内蔵「誠しく洗ひ上げた誠でござる」　戸田「夫をでハ、赤穂城内での秘密の血判は、何うなりました」　内蔵「秘密の血判は、今年山科で焼いてアふたのでござる」　戸田「夫しでハ仇討の議は」　内蔵「今となつては出来ません」　戸田「して妾の兄の小野寺十内は、如何致しました」　内蔵「内匠の兄様の小野寺氏は、山科に居られたが、當時は京都の島原で幇間をしてござるぞよ」　戸田「エッ、その幇間とは、」　内蔵「席を賑す、男芸者でござる」　戸田「ヒエー」　内蔵「だが生命に別状はない、御安心居さる」　戸田「夫れ

では養子の幸右衛門は如何でござります」内義「ア、幸右衛門殿も何変やらで、舞つたやうに思いますがな、オ、ソレ〳〵伏見の墨染で、赤い袖なしを着て雪駄を穿き、編笠を被つて櫛を掻げて、鐘を叩いて飯を貰りに廻る、買うて下さるお客人にも、踊りを踊つて見せろ、イヤハヤ品のよいこと、實に内義殿は感心致しました、ヤ、ヤ、そもでハ幣帛を仕たり、飯賣など、揃ひも揃ふた兄と弟、今度お出舞ひ遊ばしたら、腹でも切つて、切めて武士らしう死ぬやうに、仰せ下さいませやう」内義「アイヤ斬り時、大事にすれば一生保てる結構な生命、腹など切つて堪るものでない、戸田殿」

節（世の中の、人と煙草のよしあしは、畑となりて後にこそ知れ）

戸田「エーツ」内義「イヤ何でもござらぬ、アハ、、、、」と

節（笑ひ紛らす大石が）

二

節（懐中に手を入れまして、取り出したのは一通の手紙）

内義「戸田殿、それはのう内義姫が山科にあつて、京都

島原へ遊びに行き、刈藻太夫と合作の、京都名不

の歌でござる、奥方が御立腹なくばお話申さうとな

り、また徒然のお慰みにと存じて、持参致したので

ござる鎌り恐しきお怒り故、これを奉るのも何と

やら、御身にお預け申して置きまするぞ、又お氣

の復すつた時、奉つて下さい、だが、今はお手觸

もしちやござらぬぞ」戸田「其方へ置いてお帰り遊バ

せ、内義「ハテ行儀が悪い、然らばお膳の上へ置き

まする、さらばでござる」戸田「おさらばでござるまし」

内蔵「ア、、女は思病で困る、ドリヤ帰らう」

節（玄関さして、ツカ〳〵、待つてゐるのは一人の下郎、身に赤合羽鍔頭巾、二枚重ねの草鞋に身を乗せて、見るまが誠の下郎なれども、真鍮金具の木刀でし指してゐるやうが、そこは寺坂吉右衛門、矢張り忠義の一人なれば、長い刀を落し差し、列べてあるのは一見の高慢駄、その身を乗せた内蔵助（……）

内蔵「待ちどうかつたであらうの」　吉右「お帰り遊ばせ」

節（背後へ回り着せかけました長合羽、紐を結んで居る内に、横にそてかけた傘を取つて、辛さやと渡せば大石殿、手に取りあげて、皆まで擡げりや風含む、下のはじきを輪輪でとめて、傘の間に顔さし入れて、恨えくし溜涙、人に見せじとかくしつ、寺坂後ける

詞「跡に残つた戸田屋、膝に置かれた手紙をば、恨の眼でおつち眺め」

戸田「静岡だの銘を貰うとは何事ぞ、アーー言ひ甲斐なき両人の者」

詞「と、右の手紙を携へ、今奥戸に差上げて御覧遊ばすまいと、その後奥へ自分の部屋に通り床敷きの

節（思ひ出だせば後や先、大武士の養子なり、大腰抜べて枕に就て寝て見ましたが、更に寝られません）

の光上と、思ひ続けて寝られぬ、また心を取直し、寝ようと思へど高寝られぬ、次第に更ける夜半の頃、空吹く風し木枯の、庭の樹木に後ろ〳〵つ、ザザザサーッ、雪折き枝の物凄く、バタ〳〵バタッ、金瑞に倒さまし竹は、自づと起ろとし、倒せし雪は跡方も

なし、櫺子に響く夜半の、夜半の鐘、）

詩吟「夜半の雪治まりて、遠寺の一ウ鐘エー
時に見るウー寒月の枯な枝に一懸るを」

詞「チヨン〳〵、ジリリン、リン〳〵」

夜廻り「ヨ、ヨ、夜中でございイー、火の用心エーーさつしやりませ」

詞「と引いて廻つた鉄棒の音、石に衝つて障子に響き、
、、、、、、、、、、、
ビ、、、何うしても寝られません」

節（寝られて堪るか今頃は、ふの年月拾も昨、やはら逃
さじ相生町、角ひき廻した裏門より、揃ひし揃ふた、
親とゐるが、君恩の為めに討入と、その働きの天晴さ、
死骸は積んで山をなし、血汐は流して龍田川山と
川との会ひ言葉、血肉をわけた戸田ぢやもの、何で寝
られて堪るべき）

詞「折から バタ〳〵と、何か忍んで来る様子、障子の

陰にピタッと止まり」

女中「旦那様、々々々」

詞「と呼ぶは慌てに居使ひの紅梅、返事をせうかと思ひましたが、餘り胸が苦しいので黙つてお花で遊ばした、すると障子をスウー、畳もじッと音せぬやう、抜足さし足覗ひより、枕許へ来て旦那様と云ふて見るが、白川夜船の空鼾　獨り頷く紅梅は、枕元の机の上に、文鎮で押してある由花こく吹が残して置いた例の手紙、ソッと抜き取り懐中して急てッカくッカと逃げんとする、中セメ合点のゆるぬ振舞と

節（大セメ曲者待つたと追ひ駆けたりッ、見咎められた上吹は、是まで〻と帯の間より九寸五分急て抜くより早く斬りかゝるを）

戸田「小癪なりや」

詞「と身を躍し、彼方へ潜りつ此方へ躍しつ、」

節（働いて見ましたが、中々年若の女といへど天晴な腕前、夫も道理か、去良宮に、数多附け人ある中に、四天王と呼ばれたる、一は小林平八郎、二番は清水一角、三番は島井の利右衛門で、四番は和久本左衛門、あるが中にも三番手、島井の娘名はお梅、偽つて御殿女中に働み込めど、若しや大石良雄より、怪しの

通知はあるまいと、秘密の話しがあつたなら、去良上様へ注進と、如何ごらしおきの為め、入り込ました紅梅なら、腕に覚えは十分あり、戸田の局は薙刀持てば、宍沢流の極意に渡り、男も及ぬ腕前なれど、切りたてられ附け入られ、今は肩口へ一刀浴せかけられ、キヤッと叫んだ一撃に、槍仮の障子ヤッと開いて、

（セメテ）寝巻姿の侍つかくつかつと現はした一人の女中、

中セメ「進ミ寄タリ紅梅の、腕首グッと掴ンで、肩に擔いだ
その早さ、ヤツと一聲諸共に、頭轉倒と投つけたり」
詞急起んとするを高手小手、上にも上のあるものかな、強
いも道理」
節元祿大天狗と呼はれた、堀部安兵衛の女房幸子、
さて此からが幸坂注進の一席）

五

節（宵のほどより寢苦しく、漸く病氣は癒つても、
後先思へば眠られず）
詞「奥方樣がお控へあるお部屋、戸田の局がお目通りを願ひ、
この申上げ、曲者がこの手紙に目を注げることを可笑
しけもと、早速お紙を奉つる」
節取る手遲しと奥方は、封を押し開き、サラ〳〵と、擴
げて讀んで見たなれば、鹿の命毛細々と、一筆ごとに

奥心記めて、今宵に迫る討入に、これ〈今生の御暇〉
お目通りは仕り候へども、千に一つや萬が一、怪しき者のお
らばと存じ、申上げぞに立帰り、明朝はまた嬉しい注
進を申上げると恐めある）

対「御覧遊ばした奥方は、思をずバッタリ思に平伏し」

節（あ、知らなんだく、斯程迄忠義な武士と、人の皮着た
人非人、大武士と罵った、知らぬ妾の浅猿しさ、許して
たもと内義殿と、嬉しい事の数々と、舅おてわ殿と殺
さうか、とは思へどもう今頃は、敵の屋敷で働き最中と、
嬉しい中に身を蹈き、逆うこの面目恥むれば、アーラ不思
議や仏壇に、宵に手向けた牧仙の花さへいとい嬉しげに
パッと開いたその中に、燈明の燈火は煙をとしてたち
登り、これ丸こを主ムが冥途より、御満足を拝バすう）

後室「恐れ乍ら殿様にハ、只今忠臣一同の者は、妄念時し

の奥最中、御覧遊ばせこの手紙」

節（佛壇に手向け、何卒首尾よく行くやうと、日頃の願ひは何度〳〵やら、嬉しき聲の滿ちみちて、我に返るその陽氣、戸田の向は、兄上や暮るの軒の上いづこであらう、何卒濕つて居て呉まと、南無阿彌陀佛と、一回唱ぶ念佛の、聲に明けゆく東雲や、曙告げた鶏鳥、坊多表でより、門をドン〳〵叩く物音烈しく、女中は八の字に

潮いて見れば這は如何に、入り込まれた一人は、昨日下部の移されし、一夜に変る武家次女、散髪の血眼で、身体一面朱に染み、呼吸も切迫〳〵

寺坂「御注進、御注進でござりまする」と

節（「恨の内」と飛び込んだ、味方一同の働きの顛末、大好大石の働き、小野寺父子の働き、岡重次郎の一番鎗に至るまで、詳しく注進いたすので、男優りの

△△△△戸田啟ゞ、泉岳寺へ首實驗に出かける、南部坂戸田
句の一席は、先づ是れまで）

天野屋利兵衛

一

節（花は三よし野一人は武士、野武士山伏浪花節、
蔓にし節のあるものぞ、其蔓を喰む駿馬の馬は
厩に鐙は櫃に、祖先傳来が家の寶、有銘名の
業物は、鞘に納めて元禄の、その文明は文部の、詩

歌管絃や俳諧の、道に深き身をやつして、昨日今日
口ずさみもてあそび、上の好みに馴れ習ひ、下町人に至るまで、
嗜まぬものぞなかりける、腰に手挟む秋水の刃に曇り
があればとて、四角四面の社頭、心の理の曲りたる、大
侍の多き世に、身は町人でありながら、人に斯うよと
教へ、諭すは引らぬ義侠の、両犯の星の天理尾
利兵衛、併らも浅野の浪尾あと、國の赤穂の内用

して、三代相恩蒙りました、其の家が元禄十とせ夏
三月中の四日に断絶して、殿は御年念の御最期な
さる、城代大石内蔵之助殿、夜討の道具を天野屋
命に替て頼むぞと、云ふた言葉を呑み込んだ)

節(海より深き、須弥山の、山より高き、大恩の萬分の一を
返さんと)

詞「大石内蔵之助より、利兵衛頼むとぞはれた言葉を

ぐつと呑みこんだ天野屋、大阪を始め、京名古屋、或ハ
播州備前大和路まで、手を延してこしらへました、夜討の
道具は二十四挺、チヤンと出来たを白長持に收め鎧
兜を、キチンと卸しまして、封印付けて、大石に引ねます
ると何卒船で江戸表まで送り届けて貰ひたいとあり
ましたから、堺の湊から船に積んで、熊野沖から遠
江灘を、江戸へ回せば品川で、堀部安兵衛と中村
勘助錺屋宗伴の二名が之を受取りまして、下谷
池の端に持帰り、倉の中へ收めましたから、釋迦も提
婆も知ない、之迄で利兵衛も喜んだ、モウ近日に
は愈々内蔵之助様が、東下りを極めたと、御思召
て居らしたこ丁度十一月中頃に表の方から、乘り込
み来ました一人の男」
討「アヽ、、、木綿の着物に小倉の帯、とらりん置いた

二ッ折、髭先たりになるべこのして、豊島下駄に身を乗せた、天野屋の表までッカくと入りこんで来た」

男「ア、御免ねえ、天野屋の旦那に頼んで、三百両計金が借りていから、そういつて呉れ」

幇「番頭か者が之をを聞いて」

番頭「コレ〳〵、御控へなさい、憚りながら、天野屋の旦那、市前のやうな者に、三百両といふ大枚の金貸すやうな、因縁がない」

男「ヤイ、縁ない搗は渡らないんだい、偽き覺えがあるから、出て来たんだい、ナア、内の旦那は謀反人に與みをして、逃へた先祖、ナニイヤサ皆まで云ふてはゆがない、黙つて三百両出せばよし、いやとほざきやア、恐をなぐらと名乗つて出たら、氣の毒なのぐら天野屋の家は、缺所になるのだ、夫ぐイヤなら金を出せ」

二

男「おらア京町堀の二丁目、刀鍛冶の職人で、長栖の喜八と
ごふ男だい、彼の旦那が謀反の兇器を誂へた事こで、俺
ア確うに承知して居るんだ、サア今に青いしやつ面かきやア
がれ」

詞「とその使奉行所の屋敷へ、恐れながら天野屋利兵
衛は、謀反人に與みして、天下法度の兇器をこし
らへまして、と訴へて出ましたから奉行樣は、ソレ天野
屋を召捕まと、三十五人の天満與力が天野屋を囲
とばうり捕方に向ひましたで、利兵衛ハ尋常に縄を
受け、死ぬる覚悟でお白洲へ引立てられりや、御奉
行は其頃浪花の西町奉行、明と云はれた松野河
内守樣が」

松野「天野屋、其方京町堀の鍛冶藤原の清國に拵し

繋る兇器を跳へた覺えがあるか、如何に」

詞「云ふより早く天野屋の前へ、突き出したのは小田宅
流の捉物、打眺めたる天野屋は」

利兵エ「今更ら隠し立ては仕りませぬ、如何にもこしらへた
覚えがございまする」　奉行「ムム、聞えし高き天野屋、
真直に申す段は感心致した、併し町人の其方よもや
斯の兇器の入らう道理がない、誰ぞに頼まれてこし
らへたに違ひはない、誰きに頼まれたら真直に云へ」

詞「聞いて天野屋はさしうつむいて、頼まれた人はあれ
まれが、利兵衛男ぢや頼むぞと、云はれた言葉ハ反
故には出来ぬ、頼んだ人の名前丈は申し上げられませぬ、
奉行は之きを聞くより天野屋を責め苦にかける、
身は八つ裂きにならうとも、内蔵の助様が元祖
懐逆げるまでは、死んでも白状仕りませぬ」

節（當時西町奉行、松野河内守に引きたてられた天野屋は、町人なれども武士にも勝る俠氣の白狀せぬにもて餘し、今日も白洲に呼び寄せて）

河内「コリヤ天野屋、其方も大阪で此の組長、又板鼻彈正の赤猩とやらサ、公儀にお手を掛けるばりを名誉と思ふ、其方を調べ切れぬ方とては、取りも直さず板野河内守の手落となるゝ其方にもせめて情けがあれば白狀致してはどうか」

節（千本萬灯の劍の下なら潜りもせうが、情けの人はくどり兼ね、花も實もある言の葉と、心の理に的又とり立て、有難涙に暮れたりしが、御慈悲深き御言葉にござりますれど、この天野屋も幸うござりまして、如何に情けあればとて、横まれた身は是々と申上ぐこと

出来ませぬ、かうして日々拷問にかけられるのも、恨みのあればこそ、何卒お許しくだされと

河内「聞いて居る天野河内守殿」

河内「黙れ、何故左様な強情を申せ、この上は罪なき者なれど、兄利兵衛と妹お芳を拷問にかける、天野屋、どうぢや」

利兵「強し方がござりませぬ」河内「ウム強情な奴、ソレ両人の子供を之へ」

節（ハッと答へて下役の者天野屋の前に引立てる）

河内「コリヤ、其の方の眼の前に於て拷問ぢや、見まい内閣の

よい双人の子供、汝が心一つに依つて此世から餓鬼道の

苦しみをせぬに済む、子供を可愛と思ひぬか」利兵「ハアーッ

節（美しうつむいて言葉なし、愈々ふたりを拷責にする十一

月の半句といふに、この寒空し何のその利兵衛ソレへ引

出だし、背中へザアザーと水浴びせる何の堪らうヒイ〳〵と

撃さへ、ぴゅーぴゅー、泣くに用捨も役人が、青竹もつてピシヤ〳〵
〳〵と背中を叩く〳〵

四

節（小父さん詫して下さりませ、何うぞお助け下さるやう、痛
い〳〵と泣きたてる、利兵衛は、つに思ふやう、コレ利さぶらう、
汝も利兵衛の子でないか、兄ぢ痛いと云ふでない、犯人で
お役にえつのぢやで、そなる、掘りは遣りはせぬ、其方の
息の根止めつたなら、父も諸共死ぬの旅、言ふかたへにも
蛇の如き、罪や火責の用意ぞ致される）

河内「汝は現在の愛いまを、殺さしてし白状せぬ、いかなる義
理ある者に頼まれたら知らぬが、奉行の身になつて見よ、
今にこの者責殺しなば、奉行なる者の法に背く、人を
殺したの上からは、孫はお上に返上し、奉行は腹を切つ
て申訳と致さねばならぬ、何の恨みなる、奉行の

家を跡形に遠はして、そしで濟むと思ふ、ドゞとうじや、わがまを可愛いと思はぬ」

利兵「燒野の縫る夜の蛍、

生ある天野屋奴にござりまする、憎しとは更に思はねど、」

節（利兵衛頭むの一言は、決してホ、ホ、反古には出来ませぬ、町人なれど天野屋利兵衛は、オ、オ、男でござります、死んで見れよ二人の者、又お奉行樣にも、賞めし強情者と褒でござりませう、いざ私の身体を、一寸試し五ツ刻みにしてなりと、お腹癒せと願ひまする

と、後言ひさして男泣き）

河内「ハテ困つた、ソレ息女を火責にかけ、下役「心得た」

詞「と從人は、お芳を火の上にさしつける」

五

お芳「キヤー熱い

節（聞けば何の惜らり天野屋は）

利兵「恐れ乍ら申し上げ……」 河田「ム、白状するか」

利兵「上げられませぬーッ」

節（ハテ困つたと思ふ裡、子供は頻りに叫び聲、もう惡いことは致しませぬ、泣かずにねんねを致しませ、行燈の紙も破りませぬ、熱い〱と泣くばかり、灸二つて御勘辨、云ふた言葉に奉行さへ、鬼をも欺く役人共も、思はず落す一ト雫、利兵衛は拳を握りつめ、聲をも立てずに喰しばる）

詞「折から表の方より散亂髪の血眼で、バタバタと跣足の侭、駈け着け来る女房おりつ」

りつ「天野屋の女房りつでござります、良人の身の上に就て、お願ひでござりまする」

詞「とばかり」

りつ「もし、良人の身上に就て申し上げます、良夫利兵

御は、決してた様な心得違ひの者でございませぬ、何卒生命は助けて下さいませと

節（血眼になり走り込む、サア之を見から女房おりつ、赤穂藩散の落しをするので、ハッと手を拍ち名奉行流石は松野河内守、ム、感めたこぢやと天野屋を、見こうう字に下げて置く）

（頃も元禄十五年、如月かかりに赤穂四十七士の仇討聞いて、恐き怒らと天野屋利兵衛、言ふて出たのも馨しや、ア、町人たゞのこの魂ひ、代々の後世で常世の後に、義侠の鎧町人武士、之にて讀畢んぬ）

浪花節稽古本 終

270
260

大正三年三月十七日印刷
大正三年三月廿三日發行

定價金四拾五錢

編輯者　東京市芝區三田三丁目七番地　尾上金城
發行者　東京市麻布區笄町九十四番地　神谷竹之輔
印刷者　東京市麻布區笄町八十一番地　大江太
印刷所　大江印刷所　電話芝四〇六番

發行所　東京三田　三芳屋書店　電話芝三七六番　振替東壹壹壹六番

終